

手紙

asitaba@ねこ

——カンカンと鉄製の階段を上る音。重そうな扉を開け、中へと入る。暗い廊下を進み、ガラス張りの扉をあける。そこには、何かに洗脳されたように動き回る人間がいる。全身黒い服で覆われていて、これも黒い帽子を、深く深く被っている。

ガシャンと音がした。今までの動作を一度中断し、目がこちらに向く。唯一の明かりであった窓から入る街灯の光も、彼の行動によって途絶えた。黒服の手元を見ると、きらりと光るものが見えた。彼がこちらへ歩いてくるまでに時間はそうかからなかった。僕は全力で逃げ出した。

(お母さん！ お父さん！ 僕死んじゃうよ！ 助けて！ 助けて！ お母さん！ お父さん！そうだ！あいつを倒せばいいんだ！)

気づいた時にはもう、彼は動かなくなっていた。彼が人間だったのかそれ以外の生物だったのかは分からない。すぐにその場を去ってしまったから。僕は、はさみを持っていた両手を眺めながら歩いていく。家に戻るとすぐに手を洗った。彼の体液を洗い流すために。それからソファーに倒れ、そのまま眠りについた。朝になって起き上がると、お母さんは朝ごはんを作っていた。

もちろん、家族にも友達にも内緒のはなしだ。

あれからいく年が過ぎた。何事もなかったかのように穏やかに過ぎていった。

普通なら、誰かが見つけて通報しているだろう。だが不思議なことに、ニュースにも新聞にもテレビにも流れてこない。これは喜んでいいことなのか分からない。

誰も知らないとは言え、俺は殺人を犯したことに変わりない。しかし、人間でなかった場合も同じだろうか。あれは正当防衛だったのだ！ 向こうも追いかけてきたのだから仕方のないことだ！ 俺は罪の意識を消し去り、学校へと急いだ。

学校の帰りにあの場所へと立ち寄った。中に入る気はなかったが、色々と気になって仕方がなかった。日は昇っている。あの頃と変わらず、ここは空き家のような。人気がない。カンカンと階段を上り、扉を開け、中へと入り、ほの暗い廊下を進む。ガラス張りの扉を開けると、そこには小さなテーブルと子供用のイス。イスの上にはきれいな裁ちバサミが置いてあり、机の上には黒い手帳が置いてあった。人のことは言えないが、激しく気味が悪い。机に近寄り手帳を手にとると、一目散にその場を去った。

この手帳は持ってきていいものだったのか。乱れた呼吸を整えながら、持ってきた手帳を開く。全く新しい黒い手帳。スケジュールのところを見ると今日から二日後の日付に丸印があった。家族の誕生日か何かだろうか、ろうそくの絵もついている。ケーキならまだ理解できるが、ろうそくをチョイスするとは何とも奇妙だ。

最後までめくっていくと、何か文字が書いてあった。青いボールペンで「俺は死んだ」と。これは誰かに見せようと書いたのだろうか。それならば、あれは人間だったのだろうか。俺は人間を殺してしまったのだろうか。涙ぐましい夕焼けに、犬が吠えた。

それは昨夜のことだった。家に帰ると妹が迎えてくれる。妹と言っても人間ではない。猫だ。妹を抱きあげ、リビングにいる父の膝へ置いていく。今は妹と遊ぶより考え事をしたい。

自分の部屋へと入る。机の上にある手紙を見ると、会社からのが二通。それと、宛先不明が一通あった。封筒の中には、雑にやぶかれた紙切れが一枚入っている。それ以外は何も入っていない。しかも紙切れには何も書いてない。本当に何も書いていないのか？ とりあえずライターであぶる。だが何も出てこない。水につけてみたが何も起こらなかった

あの手帳だ！　すぐさま手帳を確認する。カバーを外してみると、破れている個所を発見できた。

「今そちらに向かっています」

と書かれている。送り主はこれを伝えたかったのだろう。そちらに向かっていますと言うことは、近いうちにこいつと会う、ということなのだろうか.....。

いつもの放課後、俺はいつもの通りを歩いていた。下を向いて歩いていたため、前にいる人に気づかなかった。

「あっ」

相手を避けようと通路の右側を歩くが、間に合わず左肩がぶつかった。すみません、と謝る暇もなく、俺の両腕が捕まった。

「.....仕事なんです」

彼はそう言った。

いきなりのもので、何が起こったか分からない。逃げ出す体勢を取るために、体を大きく揺らし抜け出す。相手は舌打ちしながらスッとナイフを取りだし、俺めがけて振りかざす。身を守ろうと、とっさに手をかざした。鋭い痛みとともに、ナイフは俺の足のひらを切った。やつはもう一度振りかざす。それを避け、俺は逃げた。

歩いているうちにハッと手紙のことを思い出した。やつはナイフを持っている。さっき見えてしまったのだが、スーツの裏には拳銃を携えていた。もう殺されるしかないのだろうか。

近くの家助けを求めようとも考えたが、やめた。俺のついでに撃たれでもしたら。そう思いとどまった。みんなに迷惑はかけたくない。それも関係のない人ならなおさらだ。俺の犯した罪だ。俺が償わなくては意味がない。しかし、体はそれを拒否するかのごとく逃げ続ける。やっぱり死にたくない。俺は大きな倉庫の中へと逃げ込んだ。しばらくしないうちに、自分ののではない足音が聞こえた。これがやつのものではないことを祈る。願わくば、これが夢であることを。

全速力で走っていると、すべって転んでしまった。痛いなどと言っている暇はない。少しでもやつから遠くへ行きたい。ここを選んだのは間違いだったか.....。そんなことを言っても今は遅い。積まれた箱の影に身をひそめ、やつが去るのを待つ。その思いとは裏腹に、足音はどんどん近づいてくる。

「.....ただ死んでもらうだけじゃないですか！　そう逃げることはないですよ、簡単です。これであなたの頭を撃たせていただければいいのです」

抑揚のないその声は、とても仕事をしている人とは思えない。まるで「殺人機」だ。俺の居場所を分かっているのか、足音は遠のくことを知らない。

途中どこかでぐちゃりと音がした。足音は止まることなく近づいてくる。人生をやりなおせるのならそうしたいところだが、俺の人生はここで断たれているようだ。さっきの傷口は、右手の生命線の中ほどで切り裂いていた。

「お子様と遊んでいる暇はないのですよ。大人しくしててください」

いつの間にか後ろにいる彼は、拳銃を取り出しスライドを引く。悩むことなく俺の眉間に突き付けると、ほんの躊躇いもなく撃ちやがった。